第14講 格助詞

PART1 の・が

格助詞（が・の・を・に・へ・と・より・から・して・にて）

★「の」の用法

① **主格**（＝〜　　　　）
体言の…用言

② **連体（修飾）格**（＝〜　　　　）
体言の…体言

③ **同格**（＝〜　　　　）
体言の……［　　　形］〜〜〜。
（例）白き花**の**小さきあり。

④ **準体格**（＝〜　　　　）

⑤ **連用（修飾）格**（＝〜　　　　）

○「　　　　」中の「の」で「〜　　　　」と訳せる。
○「　　　　」の「の」

★**「が」の用法**

「の」と同じ。ただし、**「が」には「連用（修飾）格」の用法はない。**

※同格の「が」

連体形**が**……連体形〜〜〜。

↓

各連体形の下に**同じ体言**が補えて文意が通じる。

（例）いとやむごとなき際にはあらぬ**が**、すぐれて時めき給ふありけり。

第14講　PART1　確認問題

①　「我あさごと夕ごとに見る竹の中におはするにて、…」の傍線部の文法的説明として最も適当なものを、次の中から選べ。

ア　主格　イ　同格　ウ　連体（修飾）格　エ　連用（修飾）格

②　「おのがなさぬ子なれば、心にも従はずなんある。」の傍線部の文法的説明として最も適当なものを、次の中から選べ。

ア　主格　イ　同格　ウ　準体格　エ　連体（修飾）格

③　傍線部の格助詞「の」の説明として最も適当なものを、次の中から選べ。

おほやけ思してつかうたまふ女の、色ゆるされたるありけり。

ア　主語であることを示している。
イ　前の体言が後ろの体言を修飾することを示している。
ウ　「の」の前後が同格であることを示している。
エ　後ろにあるはずの体言の代用となっている。

④「よろづの虫の、恐ろしげなるを取り集めて、…」の二重傍線部の格助詞「の」と同じ用法の「の」を用いたものとして最も適当なものを、次の中から選べ。

ア　この姫君ののたまふこと
イ　男の童の、ものおぢせず、いふかひなきを召し寄せて、
ウ　箱の虫どもを取らせ、
エ　よろづのもとどもをたづねて、

⑤　傍線部の用法が他と違うものとして最も適当なものを、次の中から選べ。

林の中ア の丘だちたるやうなる所にて逍遙（せうえう）したまふ。
叟（そう）（＝老人）イ の帽子したるが、舟を葦（あし）につなぎ陸（くが）にのぼり、杖をつきて、琴の調べの終はるを聞く。
こウ の琴弾きたまふは誰ぞ。
「ただ国エ の賢き人として政（まつりごと）をし、悪（あ）しき事を直したまふ賢人（かしこびと）なり」と答ふ。

第14講　PART1　確認問題　解答

〔解説〕

①　「竹の」は後に続く「中」という体言を修飾しているので、「の」は連体（修飾）格。よって、ウが正解。

②　「が」の下に「なさぬ」と述語が続いていることから主格であるとわかる。「私が生んでいない子なので〜」と訳せることからも判断できる。よって、アが正解。

③　「の」の下に「色ゆるされたる」という助動詞「たり」の連体形があることに着目する。この下に省略されているのは「の」の前にある「女」である。これを入れてみると、「の」の前後が同格とわかる。よって、ウが正解。

④　二重傍線部の「の」の下に「恐ろしげなる」と形容動詞の連体形があることに着目する。この下に省略されているのは「の」の前にある「虫」である。これを入れてみると、「の」の前後が同格とわかる。したがって、この「の」は同格。アは主格「が」。イは「の」の下に、「いふかひなき」と連体形があるので、そこに「の」の上の体言を入れて訳してみると、「男の童で、物怖じをせず、身分が低い男の童を召し寄せて…」とおかしくない。よって、イが正解。ウ、エは連体（修飾）格の「の」。

⑤　イの「の」は、下にある連体形「たる」（助動詞「たり」）の下に、「の」の上の体言「叟（そう）（＝老人）」を補って、訳が下に続いていくので同格の「の」。他の選択肢は、全て連体（修飾）格。よって、イが正解。

〔解答〕

①　ウ　②　ア　③　ウ　④　イ　⑤　イ